死にける父の心にぞ、
掛けし、わがまた最終に、
心を注ぎ今よりぞ
苦しみ薄くなりゆきて、
いつか自由になりもせむ
彼のためにと惜しからぬ
生命保ちものなるを。
その天性の精神に、
よればか或(ある)は自の、
心を張りてゐたりしか

疲れでありし末弟も、
今は打撃を被りて、
日毎日毎に幹の上に
衰ふる木と萎れたり。
あゝ、あゝ、神よ、人魂(ひとだま)の
いかなる形、あるは又、
いかなる法によるにせよ、
飛び去るを見るは恐ろしき。
われ人魂の血にまみれ、
突き出るを見き、或時は、

浪荒れ狂ふ太洋に、
痙攣的に動くなる、
それを見たりき、病床に、
罪惡を悔い、恐怖もて、
狂へるも見き。それら皆、
恐ろしかりし光景よ。
されどもわれの末弟の
それは恐れをまじへざる
悲痛のものにてありしかな、
その衰弱は確實に、

おもむろに靜に、柔かに、
やさしく彼を蝕(むしば)めり、
涙流さず、しとやかに、
あとに殘れる人のため
親切に愁ひたりけるが、
その間、頰は花のごと、
死をあざけりて見られけり。
されども、その色、ゆるやかに、
散りゆく虹と失せゆきて、
其の透明の兩眼は、

獄を照らせる光明と、
輝きにけり。しかうして、
天命またで死にてゆく、
不運を嘆く言葉無く、
哀哭も無く、たゞ僅、
もだして心悲しめる
われ勵まさむそのために、
他日よき日もあるべしと
われに關する希望をば、
口にしたるに過ぎざりき。

あゝ、この弟の死亡こそ、
最大の悲痛なりしかな。
彼は衰ふる身體(からだ)より、
出づる溜息も制へしよ。
呼吸、しだいに退きて、
度數も、稀になりゆくを、
聽かむとせしも得ざりけり。
氣遣はしさに、亂暴に、
聲をばあげて呼ばはりぬ。
呼ぶとてかひはあらざりと、

知れども憂慮はわれをして、
静に制止させざりき。
呼びける時に、われ聞きぬ、
一つの響！　その時に、
われは鐵鎖を斷ち切りて、
一躍りして飛び行きぬ。
されど早、彼、死しありき。
獄舍の暗き場所にたゞ、
われのみひとり動きしか、
われのみ生きて、たゞひとり、

吸ひけり獄舍の呪はしき
濕り冷き空氣をば、
おのれと死との間なる、
最後の而も一つなる、
親しき鏈鎖、消えてゆく、
家系に我を繫ぎてし、
絆は今は、不運なる、
場所に全く破られつ、
地上に、一人、地下に一、
二人の同胞死にしなり、

靜に伸べし手をとれば
われのも氷の如かりき。
動き或は爭はむ、
力も今は失せたれど、
なほ生けりとは感じてき。
そして愛する者逝きて、
歸らずと知りしその時の、
物狂ほしき感情は
われの胸をば塞げりき。
あゝ、など地上に望みなく、

死なであるかの理由をば、
われ見出すに苦しみぬ。
さはれ信仰、それのみが、
わが自殺をば禁めしよ。

九

その次にわが身の上に、
いかなる事の落ち來しや、
われは知らざり、知りも得ず、
はじめに光、消え失せて、
つぎに空氣の無くなりて、

暗、また失せて行きにけり、
われおもひなく感じなく、
何物もそこにあらざりき、
石の間に石と立ち、
霧の圍める樹のあらぬ
崖の如くに知覺無く、
すべて、空しく、物凄く、
灰色なりき、夜に非ず、
又、晝ならず、わが重き
眼の憎むなる獄中の、

薄き光にもあらざりき、
何物もなき空間よ、
固定も、所、持たずして、
星無く地無く時もなく、
制遏も無く變化無く、
善無く、氣候も、あらずして、
たゞ沈靜と動かざる、
呼吸あるのみ、生ならず、
又、死にあらず　さながらに、
盲目にして、涯知らぬ、

沈默守り動かざる、
流れぬ海に似たりけり。

一〇

おのが頭の上にして、
光は照りぬ、そは鳥の
歌にてありき、しばらくは、
歌ひやめしが歌ひ出ぬ。
さばかり心娯しまず
歌をば未だ聞かざりき。
はからず聞きし、うれしさに、

わが眼、溢るゝおもひしぬ。
されば、しばしは忘れてき、
おのが悲惨の身の上を、
やがて静に感覺の、
かへり來ればもとの如、
かこみてわれに押寄する
壁また床を見たりけり、
匍匐してある日光を。
鳥は來りし壁隙に、
前のごとくにとゞまりて、

樹よりも馴れて見えにけり、
淡青色の翼持ち、
姿、かはゆきその鳥は、
歌におもひの數々を、
われに云ふかとおもはれぬ。
われ、これに似る鳥を見ず、
またこの後も、見ざるべし、
そは、われのごと、友びとを、
もたざる如し、然れども、
さびしさ、痛くかなしまず、

生けるものにて、このわれを、
愛するものゝ無き時に、
われ愛すべく來し如し。
獄の崖に慰めて、
われを再び感じ又、
物おもふ身となしくれぬ。
この鳥近く放たれし、
あるひは籠をうち破り、
われ在る籠に來しものか、
われ捕はれの苦しみを、

知れば好き鳥、わは汝の、
とらはれをしも願はざり、
こは天上の樂園ゆ、
鳥の姿に身をなして、
訪れ來にしものにやと、
われはその時、おもひにき。
笑ひつ泣きつしゝ際の
思ひと、天よ咎めざれ、
弟の靈のわがそばに、
下ることもやあらむかと、

時々おもひし我なれば。
されども鳥は飛び去りき、
われはおもひぬ、靈ならで、
鳥なりけるよ、弟の
靈にしあらば、飛びゆきて、
前にもまさるさびしさに、
われをば、ひとり置かざりと。
あゝ、屍衣をもて包みたる、
死骸の如き、さびしさよ、
空、青々と澄み渡り、

樂しげに見ゆる快晴の、
日の大空に用無きに、
現れ出でし一片の
孤獨の雲のさびしさよ。

一一

われの運命に變化來て、
獄吏、慈愛をみせ初めぬ。
わゝその理由を知り難し、
彼等、悲慘の有樣を
見馴れし者にてある故に、

されど、まことに、あはれみを、
彼等は、われに加へたり、
わが斷ち切りし鎖さへ、
環をば、あはせで、そのまゝに、
さればおのれは獄内を、
隅より隅に、上下に、
殘る隅なく踏み廻り、
又、横りて歩むべく
今は、自由となりにけり、
一つ一つと圓柱を、

廻りて、歩みはじめたる、
ところに復るも儘なりき、
たゞ心して、芝草も
あらぬ弟の墓二つ、
踏まざることに努めたり、
もし、不注意に、わが足の、
墓汚しぬとおもふ時、
わが呼吸重く、喘ぎ初め
うち碎かれしわが心、
暗くしなりて病む故に。

P 173は
P146の次に入ります。

二

われ墻壁に、つくりたり、
足がかりをば、されどわれ、
のがれむ爲にあらざりき。
人の形をなしにたる、
ものにて我を愛すべき
何れも、既に死にたれば、
嗚呼、今、廣き世の中も、
われには獄舍(ひとや)と見らるれば、
子無く、父なく、親族(みより)無く、

ともに苦しむ同志無し、
われは、それらの無きをしも、
喜びたりき、それらをば、
思へば心狂ふ故。
されどもわれは門を
なされし窓にのぼるべく、
好奇の心湧きければ、
見たしと眼をば靜にぞ、
高き山嶺に向けにける。

一三

われは眺めぬ山々を、
山々、昔のまゝなりき、
わが骨組みの如くにも
變らでありぬ。われは見ぬ、
數千年の白雪を、
その山々のいたゞきに、
その山下の長廣き
湖を、又、滿々と
青く流るゝロン河の
河床巖や、折れし樹の、

上を激しく奔り鳴る、
響を聞きぬ。また見たり、
遠き市街の白壁を、
それより白き帆のかげの
飛ぶが如くに下れるを。
そこに小さき島ありて、
わがまのあたりに笑へるを。
この島ぞ、わが眼界に、
於ける一つの風景畫。
小さき緑の島にして、

わが居る室より廣からず、
されども高き三本の、
木ありて島のいたゞきに、
山よりの微風吹き渡り、
島のめぐりは波立ちつ、
若かる花は、しとやかに、
よき色香もち、生ひ立ちつ、
魚、城壁に添ひ泳ぎ、
彼等いづれも喜べり。
高吹く風に鷲飛びぬ、

さばかり早く飛ばむこと、
恐らくまたとあらざらむ。
その時、涙湧き出でて、
われは惱みぬ、なまなかに、
鎖を斷ちてある身をば。
足がかりより下りし折、
われの獄舍の闇黑は、
重荷とわれに落ちて來ぬ、
そはわれ〳〵が生さまく、
おもへるものを埋むべく

堀られし穴とも思はれぬ、
されどわが眼は闇黑に、
慰めを得べくおもひけり。

一四

幾月かまた幾年か、
幾日なりや數へずて
記錄もなさでありにしよ。
われ眼を上げて物憂かる
塵を除かむ希望絶え。
然るに人の入り來り、

われを釋すと云ひにけり、
われは理由を問ひもせず、
どこにやらるゝ身ぞやとも、
心に懸けでありしかな、
繫がれてあるも、あらざるも、
變りなきまでになりゆきて、
絶望さへも好めれば、
人々來り、いましめを、
皆、のぞきてし、その時に、
周圍の重き墻壁は、

隱者の庵と親みを、
おのれの胸に起させて
こはわが所有の心地しぬ。
そして彼等は第二なる、
わが家よりわれを裂かむとて
來れるものとも感じてき。
蜘蛛とおのれは睦みしよ、
その陰氣なる業なせる、
彼等のさまを見まもりつ、
また月光の下にして、

遊べる二十日鼠見き、
彼等の親み持つ家に、
われのみひとり疎くてや、
彼等とわれは友なりき、
われは彼等の種族をば、
統御なすべき王にして、
彼等殺さむ力もてど、
奇なりや、共に平静に、
むつみ住むべくありけるよ。
われは、われをば繫ぎある、

鐵鎖をさへも友としぬ、
かばかり長き親交は、
その境遇に馴れしむよ、
われ其の獄を出づる時、
嘆聲もらして見捨てにし。

希臘

——バイロン「ドン・ホアン」中に、希臘音樂家をしてこの詩を誦はしめて、希臘人を嘲笑し刺戟したり。後、彼、希臘獨立軍に投じてそこに病死せり。——

一

希臘の島々、希臘の島々
其處は熱烈なるサッポーの戀をしそして歌ひし所、
戰爭の又、平和の技術の發達したる所、
ディロス興り、フイバスの出でし所よ、

欠

欠

第二篇　シエリイの詩

——へ

なほ、君、われを眺めませ、
その美しき君が眼を、
われのほかにな、遣りましそ。
其の眼は、われに戀をこそ、
與ふるものよ、その眼こそ。
そは君が美の反射なり、
われの靈より、發射する

君が持つ美の反射光。
なほ君、われと語りませ、
君が聲こそわが胸の、
あゝ、反響の調なれ。
君、なほ、この身を愛すとぞ、
われは聞かまく思へども、
君はあだかも、鏡臺の、
前にしありて、おのが身の
姿ばかりを氣に懸くる
人の如くに在すかな。

さるに我はも、君が身を、
眺むる事に痩せたりな、
時々、嬉しき此の勞苦——
君よ、かくして病まむ時、
われを憐み、やさしかれ。

わが心の女王へ

わが戀人よ、さまよはむ、
うす暗がりの森さして、
月あきらかに上る時、
われ君に、そと囁かむ、
冷き夜氣の中にして、
日中に語り得ぬことを。

君に近くしある時の、
胸に湧き立つ物思ひ、
そのいさゝかも語らまし。
星の、やはかる光より、
なほも輝く汝が姿、
空より來る緯の、
ごとくに見ゆる美しさ。
塔に流れに蒼白き、
月、銀の色なせる、

光の出水見する時、
わが胸占むるおゝ女王、
君の顔の上、さまよへる、
つめたき光りに見ま欲しや。

君、我に添ひ、さまよはむ、
休みもあらぬ、海邊をば、
かくて險阻にためらはむ、
下に搖り咆え躍るなる、
濤の流れも聽くならむ。

斷えず盛んに湧く浪や、
泡立ち走る波頭、
その上を吹き、夜すがらを、
狂ひ廻れる暴風は、
幼き日よりわが胸に、
烈しかりにし戀情の、
その鬪ひに似たるかな。

月、輝きてのぼる時、

海また森へさまよはむ
いざや戀人もろともに、
われ君にそと囁かむ、
冷き夜氣の中にして、
日中に語り得ぬことを。

戀愛哲學

一

泉は、海と混り合ひ、
河、大海と混りあひ、
み空の風は、とことはに、
快き感情と結ぶなり。
あはれ、世界に單獨の、
ものはあらずて、物皆は、

御神の法に從ひて、
一つ心に結ばるに、
何とてわれは、あゝわれは、
慕へる君に結ばざる？

二

見よ山々は、高空と、
浪は浪とし、くちづけり、
姉妹花は兄弟を、
蔑むことを許されず、
日の光はも、地を抱き、

月の光は海原と、
親き接吻を交さずや。
あゝ、君、われに接吻せずは、
それらたのしき接吻も皆、
何かあらむとおもふかな。

メリイへ

鳶色の、あきらけき眼を輝かし、
此處に在りにし、わがメリイ、
君が美音は、薄暗き、
蔦の小家の中にして、
たゞ、一羽なる友鳥に、
戀の心を歌ふなる、
鳥にも似るとおもふかな。

あはれ其の聲、今までに、
きゝしことなきうつくしさ。
君が額は伊太利の、
晴れし空より清かりき、
愛しきメリイよ疾く來れ、
君と離れてある間は、
病み心地なる我なるを。
戀人の君、君われに、
月と日沒
西星と薄ら明りの如くにて。

愛しきメリイよ、こゝにして、
君はありしか、わがメリイ、
城は『此處に』と反響す。

印度夜曲（インデアン、セレネード）

一

わたしは夜の、快い
第一睡に、
あなたをば　夢みて起きた。
其の時に、風は低く吹いて居り、
星はあかるく照つて居た。
あなたの夢から起き出でて、

わたしの足に居る靈の、
導くまゝに行きました。
——どうして行ったか誰が知らう——
あなたの閨の窓のべに。
可愛い人よ——

二

闇に静な流の上に、
さまよふ空氣も息絶えて、
金朴の香も消えてゆく、
さながら夢の快い、

おもひのやうに消えてゆく。
夜鶯の怨み言、
それはあの鳥の胸に失す。
わたしがあなたに死ぬやうに、
あなたが死んでゆくやうに。

三

わたしを草から起してよ、
わたしは死にます、
氣が遠くなります、
私は仆れます。

あなたの愛を、ねがはくば、
接吻の雨と降らせてよ、
わたしの脣に、青白い
瞼に注いで下さいな、
あゝ、あゝ、私の頰べたは、
冷く白くなりました。
私の心臟は音高く、
どく〳〵、早く搏ちまする、
おゝ、此の胸を今一度、
あなたの胸に抱いてくれ、

あなたの胸で破れませう。

過去

戀の樂しき部屋内に、
葬りたりし幸の時、
忘れむとてか、わが君は、
土に埋むる代りにと、
冷き死骸のその上に、
花また葉をば積みにしか、
落ちし喜悅の花をもて、

殘る希望の木の葉もて。
過去を、死骸を忘れしか、
恨みに迷ふ亡靈の、
今、なほありと君おもへ、
あゝ、おもひでは心をば、
墓となすかな、
嗟、悔は心の闇を辷るかな、
凄き囁き、かくぞ云ふ、
『失せし快樂は苦み』と。

われは戀故

あはれわれはも衰へぬ、
われは戀故、死んでゆく、
ゆふべに變る赤光の、
下なる色の青白き
雲の如くに力無く、
あはれ、わが身は、暴風の、
霧のごとくに死んでゆく、

凪ぎの波とも衰へて——

南の淑女

あゝ、戀に弱り果てしか、
南の淑女、レバナーンの樂園
シーダーのさし交せる枝の下に横はる。
あはれその脣に、戀の渴きのありつるを、
あはれその眼に、やさしき光ありにしを。

時

測り知られぬ海、その波は年よ。
時の大海、その深き悲哀の海は、
人間の涙の鹽もて、鹹味を帶べり、
汝の果無き大海、そは干潮と滿潮もて、
死の限界を制す。
そして取り食む病氣は、
なほ更に、たけりつゝ、

つれなき磯に、汝が破船をうち上ぐ。
風ぎにも不信、嵐には怖き、
汝に向ひ、誰か旅立つ、
測り知られぬ、海原に——

羅馬と自然

あゝ、あゝ、羅馬も亡びては、
君の見るごと、それぞとは、
分かぬ古跡の積めるかな、
されど自然は、死なずして——

我王たるを願はじな

われ王たるを願はじな
そは、あゝ、戀の嘆かひに、
あはれ似るかも、
權力を得むその道は、
嶮しく荒く、暴風は、
上に威力を振ふなり。
我は王位に上らじな、

そは日盛りに運命の、
太陽に溶けてゆく氷の座、
さらばよ、王よ、われ、かくて、
あらば憂は早く來じ、
王は王たれ、我、遠く、
羊の群を守りつゝ、
ヒマラヤにしもあらむかな。

死

一

こゝに、かしこに、あはれ死よ、
死こそ忙し、いづこにも、
周圍に、内に、上、下に、
あゝ、われ／＼は死亡かや。

二

われらの皆に、われ／＼の、

感じの皆に、われ／＼の、
あらゆる智識に、われ／＼の、
恐れの皆に、あゝ、死こそ、
其の印章を捺しにつれ。

三

われらが歡樂、先づ死にて、
希望、恐怖の死にゆけば、
負債は、こゝに拂はるも、
埃、埃を要求し、
われらも、終に死するなり。

四

愛で、いつくしむもの皆も、
われらの如く消えて行く、
かくも荒かる人の身の、
運命なる故、愛づるもの、
亡びずとても愛失せむ。

詩と音樂

坐りて、名ある詩人の、
詩を讀む時の、うれしさよ、
少し注意の衰へし、
休止の時の、ぼんやりを、
充す音樂、聽く時の、
その心地快さあ〜如何に——

雨と風

重き濕氣の苦痛を、
持てるが如く、
寒風の、生々しさを失ひて、
そこにかしこに灰色の、
うち曇りたる霧圍氣の
中を行く時、
おゝ、雨の定まりも無き交替や。

天地流浪者

一

光る翼に輝ける、
飛行をすなる、
おゝ星よ、われに告げかし、
汝はも、夜の如何なる洞窟に、
その翼をば休むるか。

二

天の家無き道をしも、
さまよひ進む、青白く、
灰色なせる、おゝ月よ、
われに告げかし、汝ばよ、
夜、晝の如何なる深みにぞ、
その休息を求むなる。

三

世界よりして拒まれし
客の如くに、うち疲れ、
さまよひ廻る、おゝ風よ、

汝、秘密の巣を持つや、
大濤或は木の上に。

廢趾の蔓

秋の日の下、房々と
赤かる色に輝きて
繁れる蔓よ
何物も、汝の趣味に及ばしな。
汝、廢趾に、古への、
死人の骨に、

うつくしき死衣(しい)をぞ、
かくも、掛くる故。

——へ

やさしき少女よ、をとめ子よ、
われは恐るも、君が接吻
君は、おのれの接吻をばし
夢、恐るゝに及ばじな、
君を舟荷に載せむには、
わが靈、深く積みたれば。

われは恐るも、君が風采、
君が語調を、動作をば、
君恐るゝに及ばじな、
君を敬ふ、わが胸の、
熱誠は、たゞ潔ければ。

雲雀へ

おゝ、おゝ、いまし、快き靈なる汝、
汝はも鳥にあらじな、あらざりな、
高きみ空ゆ、或はまた、み空近くゆ、汝こそ、
たくまぬ節の妙をもて、
いとも、をかしく揚々と、
胸に溢るゝ歌注ぐ。

地をば離れて、なほ高く、
なほ高々と、火の雲の
如くに、みどりの大空へ、
飛びて、汝は歌ひつゝ、
舞ひ上りつゝ、歌ひつゝ、

まだ、のぼらざる黄金色の
光の上に輝ける
雲をば超えて、汝はも、
漂ひつゝぞ走るなる、

さながら天に生活を、
はじめし樂しき靈とこそ。
あしたの空の色薄き。
紫だいに、飛びてある、
汝のめぐりに、溶けてゆき、
汝の姿は、日盛りの、
空のみ星と見えざれど、
鋭く響く喜びの、
歌こそ、われにきこゆなれ。

かの明星ゆ、射る矢とも、
鋭かれども、あきらかに、
われらは見得ず。
明方に、其の燃え盛る、
燈火の光弱まり、
ありぞとは覺ゆも、薄れ
見難かる、その明星か、汝の影。

晴れわたりたる夜にして、
たゞ一片の雲よりぞ、

月、光をば、雨降らし、
み空に溢れ充すごと、
汝の高き聲こそは、
天にも地にもひゝくなり。

汝は何か、われ知らじ、
いましに似るは何物か。
虹雲よりの、まばゆかる、
露の流れも及ばしな、
汝が雨降らすメロデーに。

世の人未だ心にも、
かけでありける望み、はた、
恐れに彼等を醒すまで、
思想の光に隱れ居て、
胸に湧き出る讃歌を、
うたふ詩人に似たるかな。

戀のごとくも心地よく、
部屋に溢るゝ音樂に、

ひとり胸をば痛むなる、
戀の惱みを慰むる、
玉ちりばめし高樓の、
貴き媛に似たるかな。

おほひかくせる花、または、
草のあひだに、いと薄き、
色を幽に散らすなる、
露の溪間の金色の、
土螢にも似たるかな。

おのが綠の葉の蔭に、
かくるゝ薔薇に似たるかな、
その花犯す暖き風、
風てふ盜兒もいと高き、
香りに醉ひて翅をば、
重くするなる薔薇にこそ。

露に燦く草の上に、
降る春雨の音よりも、

雨に色增す花よりも、
はたや、世に在る快き、
清かる又は新しき、
もの皆に勝す、汝の樂。

汝は靈か、はた鳥か、
我に敎へよ、いかばかり、
いまし、うれしきおもひなる、
未だも聞かず、かくばかり、
崇き喜悅表せる、

戀の歌、また酒の歌。

古き希臘の結婚の、
合唱の歌、或はまた、
凱歌の聲も、汝が歌に、
比すれば、唯の誇りとも、
思はれ、何かもの足らず。

幸に充つ汝が歌の、
その源は何なりや、

如何なる野かや、海か、また
山かや、空の、はたや、地の
形なるかや、汝等が、
愛やいかなる、いましらが、
苦しみ知らぬ事や何ぞ。

汝がよろこび清くして、
鋭くあれば、いつまでも、
疲れ來らず、煩ひの、
影は近くに寄りもせじ、

戀はすれども、知らざりな、
こひの悲しき飽き果てを。

つねく、汝は死につきて、
われらの思ふより、深く、
いや眞なる悟りをば、
もてるとおぼし、然らずば、
いかで流れむ、その歌の、
瑠璃の流れのごとくにぞ。

あはれ、われらは、前おもひ、
後を煩ひ、今あらぬ、
物をし得まくあこがるや。
いともまじめの笑ひにも、
なほ苦みの混らずや、
我等が、いとも、よしとする、
歌は語るよ、悲みを。

よしや、われ〳〵憎くしみを、
誇り、おそれを、さげしむも、

或は涙の一雫、
流さぬものと生るとも、
汝が持てるよころびに、
近づくべくも思はれず。

快き音の曲調の、
總てにも勝じ、書の上に、
見出す寶の總てにも、
まさる汝の巧妙と、
詩人は思ふ、おゝ汝、

この世をあざむ、おゝ汝。
汝が頭に覺ゆなる、
そのよろこびの半をば、
われに與へよ、それ得なば、
狂熱の調、脣を、
流れ出づべし、その時は、
われが、汝に今、醉へる、
如くも人等、聽かむかな。

——へ

樂の細音の消ゆる時
絃の震ひは人々の
記憶の中に殘るなり。
やさしき菫、病める時
薫りは生きむ嗅覺に、
薔薇の花の枯るゝ時、

葉は戀人の床と積む、
やさしき君の去りし時
君の思想は、おゝ戀は
そこに眠ると思ふかな。

ランプの碎け破れなば

一

ランプの碎け破れなば、
暗に光りは消ゆるなり。
雲散りゆかば、虹の彩、
見えずなるなり。
琵琶にして、破るゝ時は、
好き音の殘らざるなり、

脣も語り終らば、
愛らしき語調も
やがて忘れらる。

二

虹の光彩、樂の調、
ランプの光、琵琶の曲、
生殘らざる如くにも。
心の響も、たましひの、
默す時には、荒れにたる
穴吹く風の如くなる

或は水夫の葬ひの
鐘を鳴らせる悲しかる、
大濤に似る哀歌より
ほかには歌はあらじかし。

三

互の心、結ばらば
戀　いち早くよき巢をば、
あとになしてぞ逃ぐるなる。
弱きものゝみ、たゞ、ひとり、
かつての戀を守りつゝ——

凡ての物の、はかなさを
悲しみ嘆くおゝ戀よ！
など君、君の搖籃に、
家に柩に選びしや、
いとも、はかなきものを君

四

その苦しみは、暴風の、
空に鴉を搖る如く、
汝を搖りて、
輝ける理性は、冬の空に照る

日のごと、汝を嘲らむ。
葉落ち寒風來る時、
汝が鷲の巣は朽ち果てゝ
汝は、あらはに、人々に、
笑はれてこそあるならめ。

西風に與ふる詩

一

おゝ荒き西風、汝は秋そのものゝ氣息か、
汝が見えざる現れにより、
枯葉は妖術づかひより、
逃ぐる幽靈のごとくに追はる。
黃に黑に、蒼白く、はた消耗熱的赤味の、

病みさらばひし群は追はるよ。
おゝ、汝は、羽ある種子を
暗き冬の寢床へと運ぶよ。
そこに彼等は、墓の內なる亡骸さながら、
冷く低く橫はる。
汝が水色の姉妹なる春風の吹き來りて
夢みる地に彼女の喇叭を吹き、
(愛らしき芽を、大氣に生きよと、羊の群の如く追ひつゝ)
生々したる色と薰りともて、

野また岡を覆ふまで。

いづこにも動きつゝある荒き靈、
破壞者、保持者、聽けよかし聽けよかし。」

二

汝は、その流れに、險しき空の騷ぎの中に、
地上の枯葉の如き
雲を放つよ。
天と海との、もつれし枝より、
搖り落して。

汝が空氣の大浪の青き表に、
雨と電光との天使は廣がる
地平線のはるか端より、中天の高きに
近付く暴風雨の鬢髮、
恐ろしきミーナッドの頭より逆立てる髮の如くに。

汝は、暮れてゆく年の挽歌、
閉しゆく夜は、暮れゆく年のために、
汝が全力もて煙霧もて、

造りなせる大きなる墓の丸屋か。
其の密集せる氣壓より、
暗き雨、電火又は霰降ちなむ、おゝ聽けよ！

三

汝は、青き地中海を
澄める流水の囁きに、あやさせて、
ベエイエ灣内、浮石島のほとりに横りゐて
其れの夢より覺ましたり。
荒るゝ日の波の中にゆらめく
水色の苔、醉ひて畫くに難き香をもつ花の、

生ひ覆へる、古き城又は塔をば、
眠りの中にうち眺めき。
おゝ汝の道に當りなば
太平洋の坦々も、
忽ちに裂き割られて
藻の花、太洋の綠氣無き葉をもてる濕れる森も
汝の聲を知りては
おそれ〳〵戰き自らほろぶ、おゝ聽け。

四

もし、われ、汝が運ぶ木の葉なりせば、

もし、われ、汝と飛ばむ雲にしあらば、
さらずばせめて、汝の自由はあらざれど
汝の力の下に喘ぎ、
汝が力の脈博分つ
浪とあらまし。

あゝ・無制御の西風よ、
天の汝は、さまよひの、わが友にして
汝が空の早さも追ひ越し得べかりと
幻想とのみいひ難く思ひたりに

幼年のわれにてあらば、
現在のこの苦しみの境涯に
汝に祈りはせざらむを。

おゝ、浪のごと葉の如、雪の如くに我、高めよ。
あはれ我、生の荊棘の中に落ち、傷き痛む。
時の重みは、汝に似て制御し難く、
疾く走り、驕りたりにし者縛り、
意氣をば挫きたりけりな。

森の如くに、我を汝が、琴ともなせよ、
よしや、わが身、落葉の如く散るとても……
汝が力ある諧調を、
悲しくもまた快き深かる秋の調をば、
われと森との二つより取れ、
汝が、はげしき靈はも、われのそれなれ、
汝は我よ、性急者、
新しき生を、早むべく、
枯れし葉と、わが枯葉をば
萬象の上に追へかし。

我のこの詩の呪文もて
消えざる爐の灰、又は、
火花を散らす如くにも、
わが言葉をば散らせ、人世へ、
われの口より鳴らしめよ、
豫言の喇叭を、まだ覺めぬ、
地の上に向ひ、吹かしめよ。

おゝ、風、冬の來りなば、

春とて遠くあらむやは。

若しも此の書物を若き女性が
お読みになるときは
先ず許り前書並後書及び其の他の
随意事項を本書に限り削除
なさる事をこふ

高男生

メリイ・セリイへ

此の世、さびしも、
そして我、君無しにして、
さまよへば
甚しくも疲れたり、
あはれ、メリイよ。

わが喜びは、今までは、

君が聲、また、ほゝ笑みの、
中に在りしを、ありけるを、
あゝ、それはしも行きにけり、
いつ、また、我の行くならむ、
あはれ、メリイよ——

雲

渇ける花に夕立を、
海また河より、もたらしつ、
木の葉、草の葉、日盛りを、
夢みる時に、その上に、
輕き影をば、われ運ぶ。
可愛き蕾の各々が、
母の、み胸に、いまだ、なほ、

休めと搖らるゝ、其の時に、
日に踊れよと覺すべう、
われの翼は露降らす。
我は霰の連枷を、
揮ひて綠の平野をば、
白色にしつ、雨をもて、
再びそれを溶解し、
雷と過ぎて笑ふかな。
我、下にある山々に、

雪を篩へば、峰々の、
大松、驚き呻きつゝ、
われ烈風の腕により、
眠る夜すがら、わが枕、
たゞ白々と美しな。
わが大空の住家なる
塔の上には、みちしるべ、
すなる電光、嚴かに。
下の洞には雷の、
足械せられ、腹立ちて、

暴れながらに咆哮す。
わが道しるべ、海陸を、
しづかの動きをもちて超え
紫色の深海に、
動ける神の愛により
誘はれつゝわれをしも、
導きてこそ過ぐるなれ。
谷の小川や崭岸や、
湖水、平原、丘超えて。
彼が夢みる、いづこにも、

山下又は流れにも、
彼の愛する靈のあり、
彼の雨にと溶くる間を、
われ青空に暖まる。

西差す日は、まばゆかる
眼を持ちて燃え盛る
大翼張りて翔り行く、
雲の背にと飛び乘るよ、
朝、星影薄る時。

そは地震にしも、うち搖るゝ、
斷岸岩の裂目にぞ、
金色の羽光らせて、
しばしを休む鷲に似る。
夕暮、かなたに、かゞやける
海より愛と休みとの、
息吹きなしつゝ、
高空ゆ、夕べの赤き覆布、
落つれば我は翼收め、
卵抱ける鳩の如、

わが空の巣に眠るなり。

人の月ぞと呼びてある、
白き焰を纏ひつる
圓き處女は、薄明く
夜半の風の散らしたる
我が羊毛の床、超えて、
音をも立てず、進み行く、
たゞ、天使のみ聞き得べき、
彼女の見えざる足音の、

われの天幕の、いたゞきの、
薄緯を破る時、
星は覗きて眺むなり。
我は黄金の蜜群と、
飛び廻る星を、わが建てし
風の天幕の裂目をば、
なほ擴げ見て笑ふかな。
われを透して高きより
落ちたる空の縞のごと、
静なる河、湖水、海、

月と星との光にて、
舗かれし如く見ゆるなり。
燃ゆる帶もて日の王座、
珠の帶もて、月の御座、
われは縛む。
旋風、もし、我が旗を、開きなば
火を吹く山も、薄暗く、
星もよろめき漂はむ、
岬より又岬へと、

橋にも似たる形にて、
渦巻く海をうち超えて、
屋根の如くに日光を
遮るならば山々は、
おのづからなる圓柱。

空氣の力、わが椅子に、
うち縛られてある時は、
嵐と雪と、電光と、
我の過ぎゆく凱旋門、

そは數知れぬ色の虹、
濕れる地の笑ふ時、
日は天上に高々と
柔き色をば織り出す。

我は地、水の娘にて、
空の嬰兒、われは過ぐ、
海、又、磯の孔、潜り、
我は變れど死なざりな。
雨霽れゆきて、ほがらかに、

天の幕屋に、おほひ無く、
風と光と中高の、
光にみ空の圓屋根を、
水色深く建つる時、
われわが石碑に、ほゝゑみて、
母胎を出づる子の如く、
墓より出づる靈のごと、
雨の洞より現はれて、
その殿堂を毀つなり。

無常

一

今日咲く花も明日は散る、
長く保てと願ふもの、
いづれも我を惑はして、
たゞちに遠く飛んで行く、
此の世の快樂は、そも何か、
夜を嘲る電光の、

輝き忽ち消ゆに似る。

二

嗚呼、徳、如何に不實なる、
友情、いかに稀なるや、
戀も、あはれの幸福を
賣るよ、虚榮の絶望に、
されど、彼等は、かく早く、
亡びゆけども、われ〳〵は、
そのよろこびや、われ〳〵が
われらのものと呼ぶ皆を

あとに殘すも。

三

空、青々と晴るゝ間を
花うつくしく匂ふ間を、
晝たのしめる眼の夜に
變らざる間を
のどかなる時のめぐれるそのひまを、
夢みよ、君よ、
あゝかくて、泣くべく覺めよ　眠りより——

アヅイオラ（小梟）

一

『アヅイオラの鳴くを聞かざりや、
彼女程近くあるらむ』と
メリイは、われに云ひにけり。
星はも、いまだ輝かず、
燭火のなほ來らざる、
暗がりに、われら在りし時。

我は思ひぬ、アヅイオラとは、
心おごれる女よと、
されば問ひけり、
『アヅイオラとは誰の名なる』と。
そして我、そは人間にあらず、
また、われを嘲る憎むべき
怖るべきものならざりと
知りたる時に、我がメリイ、
われの心を推し測り、
笑ひながらにかくいへり、

『君な騒きそ、そはたゞに、
小さき夕の梟よ』

二

あはれ、悲しきアヅイオラ！
森の邊に、川のべに、岸の牧場に、
山際に、或は野邊に、
いと廣き沼のほとりの夕暮に、
われは聞きけり、汝が樂を——
されども未だわが心、
動かざりしよ、なが樂に。

聲にもあらず、笛又は、
風、鳥の音にあらずして
それらのものに似もやらず、
はるかに、まして心地よく、
きこえけるかな、汝が聲の、
あはれ悲しきアヅイオラ！
此の束の間ゆ、
われ汝と、汝が悲しき叫びとを、
愛づべしとこそおもひつれ。

秋

弔歌

一

暖き日は弱りつゝ、
身にしむ風は、い哭きつゝ、
裸の枝は、嘆きつゝ、
青白き花、凋れつゝ、
あゝ、年今し臨終の
床なる地にぞ、朽葉もて、

うち包まれて横はる。
いざ月々よ、去れよかし
十一月より、五月まで、
いとも悲しき列なして、
死にし、冷き年の在る
棺のあとにと従へよ。
かくておぼろの影のごと、
年の墓邊に宿直せよ。

二

肌刺す雨は、い降りつゝ、

人蛟む蟲も力無く、
這ひ廻りつゝ、河々は、
次第に水に膨れつゝ、
雷は逝く年の爲め、
とむらひ鐘を鳴らしつゝ、
うれしげに見ゆ燕、
遠くに去りて蜥蜴ども、
いづれも住ひに去りけりな。
いでや、月ども、行けよかし、
白、黑、灰に裝ひて。

かくて汝等の氣の輕き、
姉妹に喜戲なさしめよ。
死にし、つめたき年の棺、
それのあとにと從へよ、
そして涙の滴々に、
墓を綠になせよかし。

バイロンへ

おゝ、強大なる精神よ、
その深大なる河中に
この時代こそ搖れにけれ、
何、憚らず吹き荒るゝ、
暴風の葦とさながらに。

おゝ君、君は何しとて、

抑へなさゝる、憤激を、
君が聖はる憤激を。

川岸

森また荒野の猛獣も、
川に飲みたる人の跡、
尾けて行かじな、岸の邊に、
いつも、そよ風、足跡の
上に、砂をば、吹き積めば——

回想

一

あゝ、青春の歡樂の
疾く逝くよりも、なほ早く、
夏のゆくよりなほ早く、
幸の夜の早きより、
なほ〳〵早く君來り、
君は行きしか、忽ちに。

葉の朽ち果てし、地の如く
眠り難かる夜の如く、
さびしや、ひとり、殘されて。

二

燕の夏は來るとても——
梟の夜は來るとても——
若き鶯鳥は君のごと、不實や、
君と飛び去るを、喜ぶ如く見ゆるかな。
日毎、日毎にわが心、朝を慕ひて、
あはれ、わが睡り、夜毎にかなしみに、

かはりぞゆきて
おのが身の冬はかひなく日の照れる、
木の葉を木々に求むなり。

三

新婦の寢床に百合の花、
母の頭に薔薇の花、
死にし少女に菫花、
三色菫ぞ、われの花、
生きたる墓に我運び、
涙をのんで撒き散らす、

とはいへ、親きわが友よ
われに希望を或はまた
懸念を浪費なさざれな。

凋れ堇に

花より薫り、失せにけり、
さながら、君が我にする、
接吻の呼吸に似し薫り。
花より色は失せにけり、
色さながらに、わが君に
たゞ君にのみ冴えし色。

萎れ枯れたる其の姿、
そは捨てられしわが胸に、
冷く静に休みつゝ、
なほ暖きわが胸を、
嘲り笑ふ如くなり。

われは泣くなり、わが涙、
蘇し得ず、その花を、
われはも嘆く、いまは早や、
再びわれに呼吸せじ、

默し嘆かぬ運命はも、
あはれ、わが身の運命かや。

フアンニイ・ゴツド井ンへ

別るゝ時に、彼女の聲、
うちふるひけり。
その聲の出でにし心臓、
破れしと知らでありしよ。
あゝ、破れしハートよりの、
その言葉も、心に留めで、
別れてしかな。

あはれよ、おゝ、あはれよ、
餘りにも、この世、あゝ、君に廣しや。

夜に與ふ

一

東の方、霧深き洞より、
西の海の波の上を、
すみやかにゆく、夜の精よ！
その洞に、ひねもす、わびしき日を
いましは喜びと恐れとの
夢を織るなり。

夢、そは、汝に恐ろしくも
又、なつかしきものたらむ、
飛べよ、汝、速に飛べ。

二

星、鏤めし、
灰色の外套に
汝、身をば、うち包め、
そして其の髪もちて
晝の眼を塞げかし、
かくて、晝の疲れ果つまで

接吻せよかし。
かくて、市を、海を、陸の上を、
さまよひつゝ、
汝の『眠り杖』を、
あらゆるものに觸れしめよ、
來れ、長く待ちしぞ。

三

われ起きて夜明を見る時、
われ、いましを、あこがれ嘆く、
光、高くも、天がけり、

露、消ゆる時、
晝、草木に重くかゝり、
疲れし日、休みを求めて、
好かれざる客の如くに、
さまよふ時、
われ汝をあこがる。

四

汝が兄弟『死』は來りて、
『われを望むや』と叫びたり、
汝の愛しき子かすめる眼もつ

『眠り』は日中の蜂さながらに、
『君が側に巣を成さむ、
君は、われをば望まずや』。
かくさゝやきぬ
われは答へぬ、
『汝ならず』と。

五

死こそ來らめ、汝、死なば、
すみやかに、いと速に、
『眠り』ぞ來らむ、汝去らば、

その賜物の何れをも、
われは求めじ、
我は求むれ、汝をこそ、
戀しき夜よ！
いまし、早くも飛びて近寄れ、
來れよ、早く、速に。

歌

一

稀に、稀にぞ、君は來るかな。
歡びの精！
幾度の晝また夜を、
君は何所へ、われ捨てゝ、
いでや行きにし？
君の飛び去りてより、

あゝ　幾度のもの憂き夜、
又、晝なりしぞ。

二

われの如き人、いかにして、
再び君を歸し得む？
喜べるまた自由なる者と共にも、
君は苦痛を、あざ笑ふ。
不實なる精よ、
君は君を要せざる物の外は
總て忘るよ。

三

うちふるふ木の葉の、
繁みに住める蜥蜴、さながら、
悲しみを見て、君は驚く、
おゝ、嘆きの太息また、
君を難じぬ、
君は近くにあらずとて
耳傾けぬ君ぞとて。

四

われをして、わが、わびしき小唄を

樂しき曲に合はせしめよ。
君はかなしみの爲めに來らず、
たゞ、身の樂みにのみ來る。
されば、かなしみは、その殘忍なる
翼をば切り棄てゝ、
君を留めんとこそすなれ。

五

われは、君の愛づる總てを、
愛すなり、歡びの精よ！
新しき木の葉の覆へる

若々しき地上、
又、星しげき夜空を、
秋の夕暮、又、金色の、
霧の生るゝ秋の晨を。

六

われは、雪を愛し
また、輝く霜の、
あらゆる形を愛す、
われは、波、風、嵐、あらゆるものを、
然り、自然のものにして、

人間の、みじめさに、
汚れざるもの皆を愛す。

七

われは靜けき孤獨を愛す、
靜にかしこく、善良なる
交りをまた、われ愛す。
君とわれとの間はも
如何に異る？
然れども君はおのれの求むるもの、
持ちておのれの如くにも、

彼等をこそは愛すなれ。

八

たとへ、彼、翼ありて、
光のごとく逃ぐるとも、
われ愛す、『戀』を、
しかれども、すべてにまして、
精よ、われ君を愛す。
君は、戀また生命よ！
おゝ、來れ、
そして再び、わが心に住めかし。

月に

一

疲れて青き汝が面、
汝は、み空を攀ぢのぼり、
地を眺むるに疲れしや
生れ異なる星どもの、
中を獨しさまよひて、
何時もうつろふそのさまは、

斷えず照さむ價ある
もの見出さで、はかなめる
まなこのさまと云ふべきか。

二

汝、汝をうち眺め、
いましにあはれみ感じたる、
靈の妹をば選び得し……

著作權所有
檢印
著者 岡本原叢書刊行會
印

パシエリ
ロイニ
ンイ
詩人詩集

定價金貳圓

大正十年一月八日印刷
大正十年一月廿日發行

譯者 正富汪洋
東京京橋南傳馬町一丁目一番地
發行者 戸田節次郎
東京市神田區三河町一丁目十六番地
印刷者 福田尚

發行所
目黒分店
東京市替東京電話
振替東京
電話
東京京橋區南傳馬町
二三五七
三四七九
一丁目
一番地

目黒分店新刊

京谷涼二著
詩集
試練の日に

四六判布製函入天金
上製
定價金壹圓
送料金拾貳錢

著者は降り來る試練の鞭の下に泣きつゝ所る年若き人、病弱より病弱への悲しき運命を歌ひて哀切、奇しき運命と戰ふ信仰を歌つて悲惨、全編是血と涙の記錄ならざるはなく、裝幀の高雅と神秘なる名畫と相待つて高貴なる魂の所藏書ともみるべきものである。あへて神をもとむる人々に一本をすゝむ。

聽け!!
病める肉體と
惱めの魂とより
絞り出されし
哀哭の祈を!

ロマン・ロオラン著　森口多里譯
ミーレー
其の生活及び藝術

菊判上製函入
挿畫
定價金參圓
送料金拾八錢

聖貧の畫家ミレー……彼の出現によつて藝術は初めて民衆と融合した。彼の生活と藝術とを考へる事無しには近代文化史の重要なる一面を理解する事が出來ぬ。ミレーの藝術は道樂ではない、惱ましき人間性の偉大なる表現である。貧苦と憂愁との裡に靜寂の法悅を體得せる偉人の創造である。「藝術家である前に人間であれ」此の事をミレーは吾人に敎示する。彼に關する著書多しと雖も情熱と智性との最高調を傾けて彼の生活と藝術とを味識し批判せる者獨りロマンロオランあるのみ。

931
B99
4

終